関連学会参加記

2020 年生物リズム若手研究者の集い参加記

原　朱音✉
九州大学 大学院システム生命科学府

2020 年 10 月 24 日（土）、25 日（日）開催の生物リズム若手研究者の集いに初めて参加しました。皆様が温かく迎え入れてくださったおかげで、初回とは思えないほど楽しむことができました。私は数理モデル解析を通して理論研究を行う学生です。これまで、アレルギーなどの免疫系の疾患を題材にして、疾患発症機序や新規治療法の探索に関する研究を行ってきました。最近では、概日リズムが健康に与える影響にも興味を持ち、摂食時刻とグルコース代謝の概日時計制御との関係について理論解析を行っているところです。様々な事象に興味を持ってきたため、いくつかの学会や若手の会に参加しましたが、生物リズム若手研究者の集いは特にユニークで素敵な会だと感じます。今年度の集いについて、以下に感想をご報告いたします。

オンライン開催の長所が生かされた企画

今年度の最大の特徴として、オンライン開催だった点が挙げられます。世話人の方の創意工夫と、それから参加者の高い意識によって、オンライン開催の魅力が存分に生かされた会であったと感じます。

目玉企画の一つに「海外での研究事情」がありました。これは海外滞在経験者の方、そしてまさに海外滞在中の研究者の方がゲストとして迎えられ、研究内容をご紹介いただき、海外での研究事情をお聞きする企画でした。それぞれの方の実体験をもとに、海外での研究に対するポジティブな意見だけではなく、様々な視点からのお考えを聞かせていただきました。ポスドク期間での海外滞在を検討している身として、率直なご意見がありがたかったです。

特に、海外滞在中の研究者の方とオンラインで話ができたことで、現地の空気を感じられました。オンライン会議ツールの Remo を用いた懇親会でも、様々な場所から参加している研究者と話ができました。オンライン会議の利点は参加者の場所を選ばない点だと思います。海外での長期滞在を検討する際に、日本の研究会への参加が難しくなりそうだと思っていましたが、現地・オンライン同時開催の仕組みが整えば、その心配はなさそうです。参加形態にも選択肢ができて、より多くの研究者と議論ができるようになると思います。世話人の方々が工夫を凝らしてくださったことにより、いち早くオンライン開催の利点が生かされた集会を経験することができました。

多様な背景の研究者との交流

これは今年に限らず、発足当初からの集いの魅力的な点かと想像しますが、様々な役職・学年の参加者が交流をするための工夫が散りばめられていることに感動しました。会期中に 2 回行われたグループディスカッションでは、7、8 人の少人数グループで研究発表をし、気負わずに議論を行うことができました。メンバーの背景を考慮してバランスよくグループ分けしていただいていて、博士号をお持ちの方から学部生の方まで多様なステージにいる人と交流できました。一方で、「若手」研究者としての共通の悩み、例えばポスト獲得や研究遂行の難しさについて共有しつつ、それでもやっぱり研究は楽しいという思いに共感することもできて、分野の将来を共に作っていくことへの期待が膨らみました。

歴史的に、時間生物学は、理論・実験の両分野の研究者が、お互いの領域に興味を持って議論を重ね、研究の質を高めあうことで発展を遂げてきた研究分野だと思っています。その姿勢が若手の会の中でも受け継がれているという空気を感じました。私としても、自分の数理モデル研究の発展の方向性について、実験研究者の方が話し合ってくださったことを何にも代えがたい喜びとして感じました。

実は私も、2021 年の集いの世話人として参加させていただく予定です。2 年交代の世話人制度にも感銘を受けています。会を主催する世話人を交代制にすることで、定期的に分野に新しい風を吹き込むことがで

✉ hara.akane32a@gmail.com

き、さらには集会運営のノウハウを共有するシステムとして、若手にとって大変勉強になる機会でもあります。歴代世話人の方々のご尽力と、若手研究者どうしが議論できる場を大切にしていこうという熱い思いに感動しました。その精神を引き継いで、少しでも会のさらなる発展のお役に立てたらと思います。

今年度と歴代の世話人のみなさま、素晴らしい会をありがとうございます。2020年12月現時点で既に次回の計画について話し合っています。現地に集まって開催できることを願って、各種イベントの企画を行っているところです。今年のような素晴らしい集いにできるよう、他の世話人の方々と力を合わせて準備してまいります。